平成29年1月16日（月）東奥日報（21面）

先端技術で寝たきりゼロ

弘前でシンポ リハビリなど紹介

弘前市は15日、同市のアートホテル弘前シティで、短命県返上に向けた弘前大学の取り組みや、ロボットスーツHALを使ったリハビリを紹介する「ひろさきライフ・イノベーションシンポジウム」を開いた。市民ら約320人が、HALを開発した山海嘉之筑波大教授ら研究者によるパネルディスカッションや講演を通じて、寝たきりゼロ社会の将来像を考えた。

市と弘大病院は医療用HALの導入を予定し、北東北の拠点を目指している。山海教授は講演で、HALを使ったリハビリによって病気やけがで長年歩けなかった人の歩行機能が改善した事例を明らかにした。

新たな医療技術を活用した地方創生をテーマにしたパネルディスカッションもあり、パネリストの山海教授や弘大の中路重之教授、HALを先駆けて導入した国立病院機構新潟病院の中島孝副院長、山本昇副市長らが意見交換した。

山海教授は「この地域をどうするか、熱いビジョンを持って挑戦することに価値がある」と訴え「HALを試そうと外国人が滞在するケースがある。導入拠点になると外国人が訪れることもあるだろう」と指摘した。

パネルディスカッションに先立ち、京都大名誉教授で先端医療振興財団（神戸市）の福島雅典臨床研究情報センター長が「100歳現役社会」を目指し基調講演した。（鎌田秀人）

HALを使った医療の将来像などを語る山海教授（右から3人目）